

特集にあたって

特集

各がん種のoncology領域や薬物療法の進歩、この5年間で何がどう変わった？

企画

室 圭

愛知県がんセンター薬物療法部 部長／副院長

この5年間、がん医療はゲノム解析と薬物療法の進歩を背景に、劇的な変化を遂げた。がん遺伝子パネル (comprehensive genomic profiling : CGP) 検査の保険診療化は、診療現場における個別化治療の実装を加速させ、各がん種で新たな治療選択肢が次々と確立された。

非小細胞肺がんでは、進行期のみならず周術期にも免疫チェックポイント阻害薬 (immune checkpoint inhibitor : ICI) や分子標的薬が導入され、根治を目指す治療戦略が現実のものとなった。KRAS G12CやHER2変異など従来困難であった分子異常に対する薬剤承認も進んだ。乳がん領域では、HER2陽性からHER2-low、ultralowへの適応拡大、TROP2やAKTを標的とした抗体薬物複合体 (antibody-drug conjugate : ADC) や分子標的薬が加わり、バイオマーカーを軸とした治療の細分化が加速している。

胃がんでは、HER2陰性例に対するICI併用療法やCLDN18.2抗体ゾルベツキシマブの登場、HER2陽性例へのトラスツズマブ デルクステカンの適応拡大など、一次治療から後方ライン治療まで分子標的薬と免疫療法が組み込まれた層別化治療が進展した。大腸がんでは、RAS/BRAF変異やMSI-High/deficient MMR、HER2陽性などの分子プロファイルに応じた標準治療が確立し、ctDNAを用いた分子的残存病変検出による術後補助療法の個別化が臨床応用へ向け進行中である。膀胱がんでも周術期治療の有効性が示され、FOLFIRINOXやGEM+nab-PTXといった強力なレジメンが標準化し、切除可能境界例や進行例の予後改善に寄与している。

本特集では、これら5領域の第一線オンコロジストによる詳細なレビューに加え、3名のエキスパートによる座談会「わが国におけるがん遺伝子パネル検査の現状と将来展望」を収録した。座談会では、施設ごとのCGP検査の運用体制、エキスパートパネルの簡略化や効率化の工夫、推奨治療への移行率 (約10~13%) の現状、膀胱がんなど治療に結びつきにくい疾患の課題、リキッドバイオプシーやコンパニオン診断との使い分けなど、実臨床に直結する知見が共有された。

各がん種の進歩は異なる様相を示しながらも、「より精緻で、より患者に適した個別化治療へ」という方向性で収束している。その実現には、優れた臨床試験・臨床研究に裏打ちされたエビデンスの構築、医療資源の適正配分、遺伝子診断から治療への円滑な橋渡しが不可欠である。本特集が、がん治療とは直接関係のない医療者にとっても、オンコロジー領域の最前線の実態を知るきっかけとなってくれること、そして、今後のオンコロジーを担う若いオンコロジストにとって、がん医療の未来を見据えた臨床・研究の発展に資する一助となれば幸いである。